

幽玄

題字 高秀秀信

横浜能楽連盟
会報 No.36
平成20年9月15日

六十年をふり返る

会長 新堀 豊彦



神奈川県白楽の丘に、大きなかまへの古い邸宅に住まっていた、観世流の準職分の中村源兵衛氏(桃山と号す)は、昭和二十三年(一九四八)七月十一日を期して「横浜能楽謡曲連盟」を立ち上げました。

それは第一回の記念素謡大会で、会場は当時横浜市内でもっとも大きな座敷をもっていた料亭「おしろ」でありました。私は、まだ新制高校になりたての二年生でしたが、高校で宝生流の稽古を始めており連盟の役員であった、父 源兵衛につれられて、その場に出席しておりました。まださすがに出演す

るに至らず、見学しただけにとどまっていたことは当然であります。戦災で

殆ど焼野原といつてよい横浜市内で、この伊勢山から掃部山にかけての公園地帯には戦前の風情も残り、特に「おしろ」(こ

れは戦後、建てられたもの)のような大きな料理屋が存在し、そこで謡曲の会が催されたこと

に、まだ少年の域を脱していなかった私の目に極めて鮮烈な印象を残したことは間違いありません。

当時の各流の役員には、横浜の様々な業種階層の名士有力者、そして県・市会議員などの政界

人が、きら星の如く居並び、能楽謡曲がそうした人々によって支えられて来た、まさに大戦前

の横浜の雰囲気がよく伝わってきているような感じであったと言えましようか。

中村桃山氏は、初代の連盟会長として、この戦前からの流れ

をうまくとらえ、かつ横浜市の文化行政にも、しっかりと楔を打ち込み、廢墟のなかに日本文化の伝統の明かりを、大きく灯すことに意欲を燃やし、それを

実現したのであります。そして、さらに彼は何として

も横浜で、五流の家元・宗家級による演能を、毎年開催すると

言う壮大な夢を持ち、連盟創立五年を経て、昭和二十八年十一月、ついに第一回「横浜能」を実現するのであります。

この頃のことについては、連盟創立五十周年誌として刊行された「お能と横浜」に詳述されておりますので、繰り返しは避けさせて頂きますが、会場難、軽費難の苦しみのなかで、みごと成功させたことは特筆大書すべきことであつたと思ひます。

りであつたと記憶いたします。あれから六十年。幾多の変遷と改革を経て今日、全国に誇れる横浜能楽堂で、我々自身が舞台に立てるようになり、又一流の能を拝見することが可能になったのであります。

先人の築かれた重く、立派な歴史と伝統を、我々はしっかりと受けとめなければなりません。そして新しい時代の要請に応えつつ、より一層の前進発展を図らなければなりません。

多くの関係者の皆様方に、今日までの長い御協力に心から感謝し、今後さらなる御指導、御鞭撻をお願いし、六十周年の御挨拶といたします。

当時、大学生としてお手伝いをさせられた一人として、想いおこせば、連盟の役員はもとよりのこと、横浜市の文化行政担当者(教育委員会、社会教育課)の皆さん、そして又、出演された観世元昭師、観世鍔之丞師、梅若實師、梅若泰之師、近藤乾三師、高橋進師 各流のトップレベルの先生方の意気込みと熱意も素晴らしく感動的な盛り上がりであつたと記憶いたします。

還暦を迎えた 横浜能楽連盟を賞す

横浜能楽堂館長 山崎有一郎



るですから、ちょうど祖父と孫と言ったところでしょうか。昔から横浜には、能楽愛好者が大勢いらつしやると伺っていましたが、むしろ能楽堂の無かったのが不思議なくらいです。

大正初めの能楽雑誌「謡曲界」誌上などにも横浜に能楽堂を建てようという機運のあることが報道されていきました。そのような記事のあつたことを覚えていたので、既に能楽堂は建てられているような気がしていました。そのうち能楽堂建設の運動が次第に盛り上がり、遂には市民運動にまで発展し、市議会に掛けられることになり、やがてこのような立派な能楽堂が、市民のものとしてお目見えすることになったことはまことに喜ばしいことでした。

こうした運動の中核として常に原動力になっていたのが、横浜能楽連盟だったので。そして数年の年月を経て、堂々たる「横浜能楽堂」の開館を見たことでした。そしてその企画・運営に当たっても、いっそう多大のご協力を戴いていることは深く感謝しております。

これからも相変わらずご支援いただきたいと思います。我が能楽堂は漸く十二年目を迎えたところ

ますもって還暦を迎えた横浜能楽連盟に心から御祝辞を申し上げたいと存じます。我が能楽堂は漸く十二年目を迎えたところ

最後に「横浜能楽連盟」のま
すますのご繁栄を祈念いたしま
して、ご挨拶に代えさせていた
だきます。

お祝いの言葉

横浜市長 中田 宏



横浜能楽連盟が大きな節目と
なる六十周年を迎えられること
に、心からお祝い申し上げます。
横浜市内の能楽の五流派が集
まり、昭和二十三（一九四八）
年に創設された横浜能楽連盟は、
長年にわたり、横浜における能
楽振興の中核を担ってこられま
した。

貴連盟の活動があればこそ、
横浜で多くの市民の皆さんが身
近に能楽に親しむことができる
と考えております。関係の皆様
の御尽力に敬意を表します。
室町時代に芸術性が確立され
た能楽は、日本の伝統的な美意
識が、極めて洗練された形で昇

華した芸術です。能は、人間の
深い情念を音楽や舞で表す舞台
芸術であり、狂言は日常を笑ひ
の世界で表現する対話劇ですが、
いずれも、数百年の時を越えて、
現代人の心に訴えるものがある
と思います。

近年では、能楽は海外でも高
い評価を受け、日本を代表する
伝統芸能の一つとなっております。
横浜においても、平成八年に横
浜能楽堂を開館し、貴連盟をは
じめとした市民の皆さんに御利
用いただいています。

このたび、六十周年を機に、
貴連盟では、次代を担う子供た
ちへの能楽の普及や、開港百五
十周年にちなんだ能楽の上演な
ど意欲的な取組みをされるとの
ことであり、今後、横浜で能楽
に親しむ方々の層が、より厚く
なるものと期待しております。

横浜市は、貴連盟のように市
民の皆さんの自主的な活動が盛
んになり、文化を通じて横浜が
ますます魅力あふれるまちとな
るよう、文化芸術活動の環境整
備を進めたいと考えております。
最後に、今後の貴連盟の更なる
発展を心からお祈り申し上げ
まして、お祝いの言葉とさせて
いただきます。

お祝いのことば

神奈川県知事 松沢 成文



横浜能楽連盟が創立六十周年
を迎えられましたことを、心か
らお喜び申し上げます。

横浜能楽連盟は昭和二十三年
の創立以来、シテ方五流の宗家
クラスが一堂に会する全国にも
あまり例を見ない「横浜能」公
演や、謡曲愛好家の方々が練習
の成果を披露する「横浜能楽大
会」、初心者に舞台で演じる機
会を提供する「五流交流のつど
い」など、各流派の方々の力を
結集した、さまざまな事業を展
開してこられました。また、平
成八年に完成した横浜能楽堂の
建設にも貢献されるなど、広く
一般の方々に優れた能楽鑑賞の
機会を提供することにより、能
楽の振興に多大な功績を上げて
こられました。これらの業績に
対し、平成十年の創立五十周年
の折に、本県から神奈川県文化賞

を贈呈させていただいたところ
です。新堀会長をはじめ、歴代
の役員、会員の皆様の長年にわ
たる能楽の普及に対するご尽力
に改めて深く敬意を表します。
能楽は、日本の伝統的な総合
舞台芸術として長い間多くの
方々に親しまれてきました。能
楽特有の静謐な空気の中で繰り
広げられる研ぎ澄まされた舞い
の美しさは、私たちをひととき
の幽玄の世界へといざないます。
近年、心に潤いを与える文化
芸術への関心が高まる中、本県
では、誰もが身近な地域で文化
芸術に親しむことのできる環境
づくりに積極的に取り組んでい
ます。皆様方におかれましては、
今後とも、六百年の歴史を有す
る能楽の持つ様式美の世界や日
本の伝統文化の素晴らしさを次代
の方々へと継承し、文化芸術の
振興・発展により一層のお力添
えを賜りますようお願い申し上
げます。

最後に、横浜能楽連盟のます
ますのご発展と、会員の皆様の
ご健勝、ご活躍を心から祈念し、
お祝いの言葉といたします。

平成二十年度 定期総会報告

企画事業担当 鈴木 力雄

平成二十年度総会は、四月二
十二日午後二時から横浜能楽堂
二階レストランで開催された。

四月一日現在の会員数五三九
名（前年比五名増）のうち三二
九名の出席（委任状によるもの
を含む）により総会は成立。

新堀会長挨拶のあと、堀江武
史横浜市文化振興課長、中村雅
之横浜能楽堂副館長の来賓祝辞
があり、連盟規約に基づき会長
が議長となって各議案が審議さ
れ、十九年度活動報告、決算報
告、監査報告。二十年度活動計
画（案）、予算（案）、役員の改選
は何れも原案のとおり承認された。
今年度は連盟創立六十周年の記
念の年であり、連盟主催行事と
して新たな企画を盛り込んだ。

まず、第五十六回横浜能は掃
部山公園に於いて二日興業によ
る、薪能を催します。

一日目は八月三十日（土）喜多
流の能「筑摩江」、二日目は八
月三十一日（日）大蔵流茂山家による
狂言「鬼ヶ宿」ほか二番で
ある。



両曲とも、横浜に所縁のある井伊掃部守直弼の作であるとともに、喜多流と大蔵流茂山家は共に井伊家と深い繋がりがあった家柄である。

第二十四回横浜五流能楽大会は九月十五日(月・祝)に開催します。五流による、同一曲・同一ヶ所の競演は、仕舞「鶴亀」とするほか、会員による素謡、仕舞などと共に、高校生以下の子どもによる演能「九頭龍」と仕舞・狂言を予定している。

シテは勿論、三役全てを子どもだけで演ずる能の素晴らしさが、高齢化している会員各位への良き発奮となり、若い人への刺激ともなることを期待している。

なお、この佳き機会に、三十年の長きにわたり連盟の発展に尽力され、いまなお活躍の高岡幸彦、堀内万紗子の両副会長が、横浜市芸術文化振興財団理事長 澄川喜一様並びに横浜能楽堂 館長 山崎有一郎様から表彰されます。

最後に役員の改選は、連盟創立六十周年や、横浜開港百五十周年の各種行事などの円滑な運営を要することから最少限にとどめる方針で、役員の推薦母体である各流派に協力を求めた結

果、喜多流の藤田克理事が退任し、伊藤博理事が就任したほか、広井徳平監事と本戸幸雄理事が、監事と理事を交代するに止まり、了承された。

謡曲ざんげ

連盟顧問 野並 豊



横浜能楽連盟が、六十周年を迎えられたとのこと、これ迄の皆様のご苦勞を思う時、心からお祝い申し上げます。

さて私がいつ頃から謡曲をはじめたのか考えてみたとき、今は亡き左右田俊夫さんから誘われたのが昭和二十六年四月、今にして考えみると、五十七年前、先生は星野利明さんという観世流の先生、以来今日までそのまま続けておれば、今頃は師範ぐらゐの腕前になっていたはずだと思ふのだが、昭和三十三年に一ヶ月余り欧米旅行の為、中断してしまつたことがつまづきの

始まり。

その後、昭和五十七年になって学友の高岡幸彦君に田辺竹生先生を紹介されて再入門。しばらくは熱心に稽古もしていたつもりだったが、これも忙しさにまぎれて何時とはなしに欠席が続き中断。その後、田辺先生も亡くなり今日に至っている。

しかしこの間、何よりの思い出は観世会館にて観世元昭師の地頭にて家内をツレとして、「鉢の木」を謡つたこと。又、久良岐の舞台でしたが「景清」を謡つて好評を受けたこと。さらには横浜博覧会の特設舞台にて高岡君のシテで「勸進帳」のワキを無本で謡つたことなどが思い出される。

そんな乏しい経験から横浜能楽堂建設に際し建設促進会副会長の務めるとか、「かもん山能」の実行委員長をここ数年勤めているのが謡曲との唯一の繋がりとなっている。

この間、一、二度 中島行雄さんの誘いで、横浜能楽堂の舞台に立ったが、現在椅子生活に慣れてしまった為、足が座敷でさえ座れなくなつてしまつた為、折角のお誘いにも応じられない始末となり今日に至っている。

六十周年のお祝によせて

連盟顧問 後藤ヨシ子



今にして続けてこなかったことを悔いている始末である。

ました私にとりまして、その積み重ねの過程で得られる多くのことは、何にも代え難い大きな財産でございました。

人の心の移り変わり、環境の激変、世界を取り巻く情勢の混沌。その中であつて削ぎ落とした「かたち」を営々と繋ぎ、「変わらない」ということを基本に、時代を取り入れながら受け継ぐことは、現代なればこそ殊の外、心に留めて大切にしなければならぬことに思えます。

戦後間もない昭和二十三年から、六十年。大空襲の傷跡も癒えない混乱の中で、日本の伝統芸能「能」の灯を、ここ横浜でともされた諸先輩の皆様に、深く敬意を捧げると共に、日頃維持、継続に力を注ぎ続けておいでる連盟役員の皆様に、心から六十周年のお祝いを申し述べたいと存じます。

横浜の地域に深く浸透し、また、流派を超えて青少年をはじめ、若い方々にも日本人の心のアイデンティティを形成する一助となる活動に力を注がれ、その成果は、同好の組織の範疇を超えた大きなものがあることは確かでございます。「能」の世界にほんの少々身を置いて参り

ました私にとりまして、その積み重ねの過程で得られる多くのことは、何にも代え難い大きな財産でございました。

今後とも伝統の継承と啓蒙、また若い後進の支えとなり、活動を発展させて頂きますようお願いとさせていただきます。

連盟四十年の思い出

副会長 高岡 幸彦



私が能楽連盟の常任幹事となつたのは、昭和四十一年であつた。それまで観世流幹事として、やつてこられた伊藤文治さんが師範となられたので、その後任として「どうしても引き受けてくれ」と言うことであつた。私は、故、田辺竹生師が私の転職してきた野沢屋に出稽古においでいただいておられたので、門下に入れて頂き二年程しか経っていませんので、固辞したのだが他に適当な人がいないということ、田辺師と伊藤文治さんが「極力、バックアップするから」と嫌応なしにされてしまった。当時、私は四十六才であつたが幹事会に出席してみると、庄司清夫会長以下、多くの方々は私より十才以上、年長の方ばかりであつた。

こうして、昭和四十二年の第十四回横浜能から、お手伝いすることになった。

この頃の能楽連盟の役目は、横浜でお能を催すことであつた。そして、各流家元・宗家との日程調整、演目等の折衝を行なつた。このように、各流の家元・宗家を招いて二日乃至三日で、お能を催すのは、戦前、野沢屋で催されていた「正月能」を踏襲したものであつた。

庄司会長は、これらの経緯をよく承知されておられ、「野沢屋・能」が盛んな頃の社長の息子が能楽連盟の幹事に入ってくるとは、不思議な縁だな」と言われた。

平成八年、念願の横浜能楽堂が完成。第四十四回横浜能からは、横浜能楽堂において、日程・演目等を管理していただいている。今年、能楽連盟創立六十周年、横浜能は第五十六回を数えることになった。

越し方を省りみると、夢のようにある。



還暦を迎えた能楽連盟

副会長 堀内万紗子



三十数年前の或る日、庄司会長（当時の連盟会長）からお電話がありました。「連盟に入つて手伝いなさい。」私は「何をします所ですか。」庄司会長「来ればわかる。」此の様な珍問答の末、役員会に出席しました。偉いおじ様方が、ずらり、女性ばかりのみ。しかも私は、まだとても若かつたのです。内容は、今年の横浜能はどちらのお流儀に、そして会場はどこに、チケットはどの様に、難しい議題の数々に圧倒されました。一番大変な思い出は、切符売りでした。あちらこちらへお願いに参上、苦勞の末に買って頂いて嬉しかった思い出は多うございます。全員一生懸命働きましたが、連盟の状況は今一つ思わしくなく危機状態、意気消沈。ところが歴史が動きま

した。今年、六十周年の祝の年を迎える迄になる魔法をかけた方が現れたのです。それは現在の新堀会長です。

そして御就任の日。前会長が二代続けて西の浄土へ旅立たれていますので「おはらいを受けなければ」とのお話しになりました。役員会の会場をあとに、伊勢山皇大神宮で全員並んでおごそかに「かしわ手」に祈りをおこめるものと想像したのは私だけでした。大変に賑やかなお浄めの会でした。

この効果は抜群で会長発案の会報「幽玄」も毎年二回発行されていますが、その一ページには必ず会長の笑顔があります。

そして連盟は活気づき、やがて想像すらしなかつた能楽堂が完成。威風堂々と掃部山の丘に座して十二年。連盟は幸せ状態です。

「能」の歴史は六百年。この能、狂言に大勢のファンが集まります。梅若のお舞台の楽屋には、六十三世、梅若実先生の「いろは四十八文字を頭に置いて居ります。そのなかの「お」から始まるくだりには「おくの

なき、芸とこのころのつく時は、来る年毎に得徳する妙。」又、「す」のくだりには「すき通り見ゆるころぞはづかしき、日々に見がけよ胸の鏡を。」いづれも心に留めて置き精進せねばと思うこととございます。

謡は大きな声を「おなか」の底から、舞は姿勢正しく「すり足」で、体の部分部分を意識し



て動きます。若い方々は、お稽古を通じて自然にお礼儀を覚える事ができます。能の台本である謡本を読む事によって、歴史や文学の世界に浸るといふ楽しみもあります。老若男女、しっかりと、明日に向かって進んで参りましょう。

鏡板がほほ笑むとき

副会長 藤本 圭祐



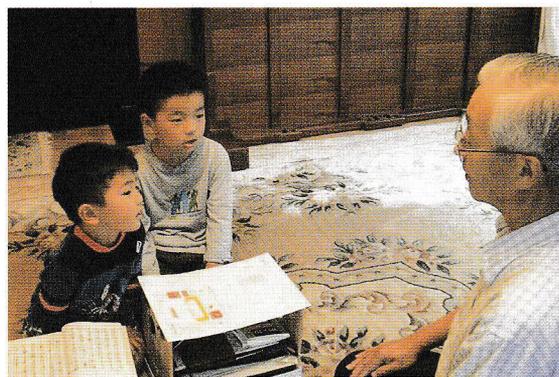
「よもおつきし…どこからか

孫の謡う声が聞こえてくる。このところ、高層マンションに住まう五歳と三歳の孫が週二回ほど来て、処狭しと駆け巡る。そんな孫が、ある日改まって「今日から謡を教えてください」と頭を下げた。予期せざることで、にわかに戻す言葉が出ず…それでも、じいじの威厳を損なわないよう、とつさに「承った、」と言ってしまった。とりあえず「狸々」キリから始めることにした。

横浜能楽連盟は昭和二十三年創立から六十周年の節目の年を迎える。平成八年には横浜能楽堂が完成して会員も増加し、活動にも格段の輝きを増してきた観がある。その能楽連盟にも近年、大きな悩みがある。会員の高年齢化である。一人ひとりに

アンケートした訳ではないが、ごく荒っぽく現在の会員の皆さんが謡を始めた時期を推定すると、早い人で子供のとき、一般にはキャリアから推しはかると三十、四十歳代であったろう。そういう視点で見ると「横浜五流能楽大会」「五流交流のつどい」への参加者に「花のエイジ」が如何にも少ない。「どげんかせんといかん」と思う。

横浜は鎖国から開国へ劇的な大転換を遂げて、来年百五十年を迎える。これからは、日本人の国際人としての活躍がごくあたり前のことになる。その時、日本の伝統文化を身に着けておれば、日本人としての誇りを持って外国の人たちとの交流が可



能になるのではなからうか。理屈はともかく、「まず隗より始めよ！」いつの日にか連盟名簿に孫の名が認められれば、由緒ある能楽堂の「鏡板」がほほ笑むにちがいない。

創立六十周年にあたって

総務財務担当 原 博之

平成四年の正月に、伊藤文治師の同門で、連盟の事務局を担当していた黒谷常務理事から、財産の整理と管理をするよう要請を受け、関係書類を整理したところ、加藤文化財団の助成金は信託預金されて無事でしたが、他の定期預金は更新されず永年放置されていたため直ちに解約、年度の剰余金と統合し、能楽振興基金として平成三年度決算に初めて百二十万円余を計上いたしました。

その後、五十周年記念誌「お能と横浜」の出版費用に充てるため一旦取り崩しましたが、幸い県文化賞賞金や浦部副会長（当時）からの寄付金、記念誌の売上金や各年度の剰余金を積立て、平成十七年度には四百五

十万円に達し、翌年には助成第一号として素人能上演に助成を行ない、今年度は第二号として「こども能」への交付を予定しております。

平成四年度から会計をはじめ事務局を担当致し、早速、横浜能四十回記念誌「横浜能の歴史」を出版、新堀会長の解説文に添えて、第一回から第三十九回までの番組の取り纏め収録を担当、田所委員の印刷所にて出版いたしました。

平成十年の五十周年には記念誌「お能と横浜」の出版にあたって、まず、大正六年発行の「横浜社会辞彙」の数千頁に及ぶ記事を、毎夜格闘して読破、明治、大正期の能楽界の動行や、政財界で能楽を嗜む人百人ほどを選ばせていただき、編纂の資料に供しました。また、元三溪園園長滝澤量治氏にインタビューのほか、出版費用の調達、出版社との折衝を経て無事出版することが出来ました。この他、記念事業として実施された素人能四番を含む「横浜能楽大会」、宝生流家元による「安宅」の「第四十六回横浜能」と共に、記念誌出版の三大事業の成功と併せ、県文化賞受賞の祝賀パーティーを盛大に開催、目出度く

締めくくることが出来ました。平成十四年には第五十回記念「横浜能」開催にあたり番組編成委員長を任せられ、番組、ポスター、ちらし等の構成を初め第一回から第四十九回までの番組の収録を行ったことなど思い出されます。

創立六十周年にあたって顧みますと、平成四年には極端な赤字財政でしたが、現在のように健全財政になったのは、能楽堂が完成し、会員が染井舞台上に立るといふ事が要因となり、各流派の努力と相俟って会員の増加に繋がったからと思います。また新堀会長の人脈の広さ、蘊蓄の深さの賜と心から敬意を表するところで、これら横浜能楽界の歴史に残る大事業に微力ながら参画できたことは大きな幸せでありました。

六十周年記念 能楽大会の概要

喜多流 杉山 昭二

横浜能楽連盟も創立六十周年を迎えました。今年恒例の横浜五流能楽大会を記念大会として九月十五日(月・祝)に開催す

ることとなりました。当日当番幹事を担当する喜多流からその概要をご報告します。

今回は平素の大会プログラムだけでなくNPO法人・子どもと生活文化協会(CLCA)の九頭龍クラブに特別出演を願う狂言や子ども創作能を披露頂くことになっております。

この九頭龍クラブは大鼓方の大倉正之助師をはじめとする能楽師の方々のご指導を受けお稽古に励んでおられる小学生から高校生のお子さま方です。能や狂言を子ども達だけで上演し、機会あるごとに各地で出演されておられます。子どもの頃から古典芸能に親しんでおられる方々の演能を拝見する機会を持つてることを感謝すると共に九頭龍クラブの今後の発展に心から拍手を送りたいと存じます。

その他のプログラムは例年通りですが、ここ数年五流が一堂に会するのであるから同じ演目をそれぞれ流派で競演してその節付けや表現がどう違うか鑑賞しようという試みが続けております。今回は記念大会に相応しい仕舞で「鶴亀」(喜多流は「月宮殿」という)を舞うことになりました。その他各流派の演目は素謡十一番、連吟七番、仕舞九番、独吟一番、独調一番を予

定しております。

どうぞ各流派とも日頃のお稽古の成果を発揮され、すばらしい記念大会となることを期待しております。またこのような会にご興味のある方は是非ご来場下さるようお願い申し上げます。

熊野の長藤まつり

金春流 三浦 重信

謡曲「熊野」は京都の平宗盛館の熊野のもとへ、侍女が郷里遠江の国から、病母の手紙を持参することにより始まります。

熊野はこの手紙を宗盛に見せて、ひと目なりとも母親に会いたいと暇を願ひ出ますが、宗盛は聞きいれませんが、そのみかこの春ばかりの花盛り

いかでか見捨て給うべきと花見車で同行を強いられ、仕方なく清水寺へ向います。着くや彼女は先ず観世音の前で母親の無事を祈るのでした。

やがて桜の下で酒宴が始まると、宗盛は熊野に舞を所望します。熊野は浮かぬ心を引き立て、「中の舞」を舞いますが、その半ばで、にわか雨が降り出し、無残にも花を散らしてしまします。これを見て彼女は又もや母の命

が思いやれ

いかにせん都の春も惜しけれど馴れし 東の花や散るらん

一首の歌を詠み、短冊にしたためて宗盛に差し出します。さすがの宗盛もこれほどまでの熊野の心を哀れに思い、その場で故郷へ帰ることを許します。

熊野は夢かと喜びこれも観世音のおかげと感謝し、又宗盛の気の変わらぬうちにと、心を残しながらも東国へと帰ってゆきます。この一曲はこうして幕を閉じます。

その後熊野は母親存命の三年間、孝養をつくしたと思われれます。

一方、宗盛の命運は誠にきびしいものでした。平家の総帥として源氏勢と対決したものの、義仲によって京都を逐われ、一ノ谷、屋島では知略に勝れる義

経の前に相次いで敗れ去り、長門壇ノ浦の海戦にすべてをかけることになりました。けれども

ここでも戦い利あらず大敗し、宗盛と長子清宗は捕らわれ、弟知盛は討死して



熊野の長藤まつり

ここに平氏は滅亡の時を迎えます。宗盛親子は京都に連れ戻され、かつて自らが君臨した京洛の都大路を、今や虜囚として引廻された後、鎌倉へ送られます。そして義経監視のもと再び西へ戻され、近江の国野洲のほとりで斬られ、果てました。ときに宗盛三十九才、清宗わずか十六才でした。

愛する人を二人共に失った熊野は尼となり、生家の傍らに庵をむすび、供養のうちに静かに生涯を終えました。

彼女が祈りを捧げた庵の跡の行興寺の庭には、「熊野御前手植えの藤」と伝えられる樹齢八百年の古木が、この春も見事な花房をつけました。境内に続く四百坪の「熊野記念公園」には、園内一杯に広がる棚の下、房長二米に近いうす紫の藤花が一斉に風にそよぎ、高雅な香りをた

だよわせています。訪れる人々がこの風光の中に身をおくとき、八百年の往時は、唯夢まぼろしの如くに想われて来るのです。

能楽連盟の越し方に参加して

宝生流 秋山 尚

横浜能楽連盟創立六十周年、誠におめでとうございます。

これも、新堀会長をはじめ歴代の役員諸氏、更には現在の役員の方々の努力の賜物と、心よりお祝いを申し上げます。

私が連盟のお手伝いすることになったのは、何時頃かは定かではありませんが、当時から能楽堂の建設に邁進しており、署名運動や募金活動に飛びまわっていました。

又その頃は、横浜能が連盟の主催であり、各流派の家元が競って出演され、会場も音楽堂や関内ホールで行なわれ、入場券のモギリをやつたりと、懐かしい思い出が一杯です。勤め料・謝金で行き詰ったこともありましたが、新堀会長の手腕で切り抜けました。

その後、順調に能楽堂の建設も進み、ついに完成し、平成八年六月二十八日落慶式典を終え、



日教能も無事千秋楽となりホッとしたのも、つい先日のようにあります。

この立派な能楽堂を有効に活用して宝生流では「神奈川県大会」「横浜連合大会」等々、大きな催しが行なわれ、他県の流友より、羨望的となっております。

連盟の多様な活動に対して平成十年には神奈川県より文化賞が授与され、その表彰式に招かれるという名誉なこともありました。能楽堂二階に置かれている記念品の鳩のブロンズを、訪れるたびに撫でまわして喜びを分かちあっております。

能楽堂の完成に伴い、久良岐舞台上で各流派毎にやっていた「謡曲と仕舞の集い」は「五流交流の集い」として一本化した。五流謡曲大会も「五流能楽大会」に衣替えして、謡、仕舞、舞囃子に加え、素人能も組みこまれる様になり、全体の企画力が一段と向上しました。現在の番組の原型もこの頃に来あがりました。

創立五十周年の記念事業として「お能と横浜」を出版するに際し編集委員として参画し「本づくり」のイロハから勉強させて頂いた。この本により戦前、戦後の神奈川県に於ける能楽の歴史が判かる貴重な資料となっています。

このことが我が宝生流の記念誌「神奈川県宝生流の歩み」の出版にも繋がりました。

今年は高校生以下の子供だけの能「九頭龍」が企画されている由、成功を祈ります。

横浜能楽連盟、横浜能楽堂、各流派の協力により古典文化の能楽を益々発展させて頂くよう、重ねて祈念いたします。

習い事徒然に

観世流 梅若会 鶴池 昭吾

紅に霞み幽玄に趣を添える春の都、木々の若葉もあざやかな五月、そして全山しぐれの紅葉の秋。例年訪れる京都には、その四季おりおりに新しい発見があつて飽きません。

古より綿々と継承されて来た京の文化の多様なさまは、近頃末期高齢者と揶揄される私ごとき凡人にも、刺激を与えてくれ

ます。

寺社仏閣、庭園、宝物を拝観して心を洗い、四条河原辺りへ収穫したばかりの蘆薈を「吹き」に参るのも楽しみであります。

ご承知のように、京都には、五ヶ街からなる、それぞれの歌舞練場（劇場）を抱え、芸妓達

が日々舞踊、三味音曲に修練を積んでいます。笛や鼓を習い、長唄、常磐津、清元と多芸を磨くのは当たり前として、歌舞伎や能楽にも造詣が深いこと

にびつくりします。かように、伝統文化を街ぐるみで継承し、そこで修練を積む芸妓さんには頭が下がります。

振り返ると、近頃はお謡仲間がだんだん少なくなる寂しさです。諸事習い事が衰退していくのは残念です。

昨年十一月、横浜能楽堂で「横浜梅若連合会十五周年記念大会」が梅若靖記師のご指導を頂き、梅若六郎師宗家以下一門のご出勤を頂き、杜中の皆さんが総出の熱演で、すこぶる盛況に行なわれましたが、次回二十年ができるのか、今から案じています。

その後、十一月下旬に比叡山延暦寺根本中堂に参詣、一年の感謝と来年のご加護を欲張り、併せて祈念して琵琶湖畔に下り、

律院の書院で大阿舍利猊下のお話を伺い、ご数珠を頂きました

が誠に偶然、摩訶不思議、余人が入らぬ書院であることか梅若六郎師に出会い仰天しました。

場所がら、ご挨拶も出来かね黙礼で失礼しましたが、信心深い師は、何を祈念されたのでしょうか。（愚人知らず）

去る五月、京に初夏をはこぶ恒例の「鴨川おどり」を観ました。前田利家の息女豪姫と結ばれた秀家が豊臣家没落後の波乱の一生「ばさら姫」が演じられました。日頃の稽古が伝わって

くる熱演は見ごたえがあります。「これ習い事なり」を痛感した次第です。

復曲能「空蟬」に寄せて

宝生流 吉田 澄夫

源氏物語千年紀を記念して宝生流の古曲「空蟬」が復曲、演じられます（十二月二十一日横浜能楽堂）。

「空蟬」は、明治時代に廃絶されて以来一度も演じられたことが無く、どこの流派にもないため、どんな能なのか見当が付きません。そこで手がかりを得るため源氏物語の空蟬の巻など

を調べてみました。

源氏物語五十四帖の第三帖が「空蟬」で、登場する空蟬は十代の頃の光源氏が知り合った若い女性の一人です。

中級貴族の娘として生まれ育ちましたが、後盾の父を早く亡くし、後妻を探していた伊予の介（伊予国の国守の次官）に妻として引き取られ、地味で堅実な生活を送っていたあるとき、彼女の噂を聞き知った光源氏が興味本位に忍んできて情を通じましたのです。

魅力的な源氏の求愛に惹かれながらも、再び寝所に忍び込まれた時には、一枚の薄衣だけを残して逃れ、その後いくら口説かれても靡こうとはしませんでした。空蟬という名前は、求愛に対して一枚の着物を残し逃げ去ったことを、源氏がセミの抜け殻に託して空蟬に贈った和歌

空蟬の 身をかへてける
木のもとに なほ人がらの
なつかしきかな

に由来しています。空蟬も、源氏に惹かれる想いのつらさを次のように詠んでいます。

空蟬の 羽に置く露の
木隠れて 忍び忍びに
濡るる袖かな

地味で容貌も控えめな女性でしたが、趣味も良く、最後まで品良く矜持を守り通したこともあって、傲慢な貴公子の源氏にとつて、空蟬は忘れられない存在となったのです。

謡本もありませんので、曲の内容は定かではありませんが、後の場でワキ僧の、読経の声に誘われて現れ出でた空蟬の亡霊が、光源氏との一夜の逢瀬を懐かしく回想し、しつとりと舞いつつ再び彼岸へ帰ってゆく、といった筋立てではないかと想像しています。恋しい光源氏との想い出の場面で、先に引用した二つの和歌が謡われるのではないのでしょうか。

昨年還暦を迎えて、一段と芸に深みと円熟さを増した大坪喜美雄師が、地味で控えめながらも上品で矜持を守り通した空蟬の姿をどのように演じるのか、楽しみです。

能「空蟬」能柄Ⅲ番目物・本舞物・大

小物・季Ⅱ初秋 所Ⅱ京三条

京極中川付近 前シテⅡ里の

女(唐織着流女出立(紅入))

後シテⅡ空蟬の霊(長編大口

女出立(紅入)) ワキⅡ旅の

僧(着流僧出立) アイⅡ里

の男(長上下出立) 舞・序

の舞

(平凡社刊「能・狂言事典」より)

小督と清閑寺

金春流 澤田 英雄

昨年の十月の中ごろ、京都ではまだ紅葉には早い時期だったが清閑寺を訪れた。清水寺から子安堂を過ぎ、歌の中山の小路を進むとやがて道は二股に分かれ、左手の清閑寺へと続く道をたどる。すると、左手に松と楓に囲まれた六条天皇と高倉天皇の御陵が現れる。御陵の前の石段を登ると清閑寺である。

昔は大きなお寺だったようだが、今は小さなお堂があるだけの静かな所だ。寺の門を入つてすぐの所に、謡曲史跡保存会による『謡曲「小督」と清閑寺』の立て札が立っている。そこには古典「平家物語」に書かれた小督局が、平清盛のために尼にさせられた所であると記されている。小督は高倉帝の愛をうけたが、帝の中宮建礼門院が清盛の娘だったため、嵯峨に身を隠す、これをもとに作られたのが謡曲「小督」である。しかし、帝の心は変わらず「私が死んだら、小督のいる清閑寺へ葬つてくれ」と遺言され、養和元年(一一八一)に亡くなられ、この寺に埋葬されたとある。

平家物語によると、安元二年(一一七六)に高倉帝の御母、建春門院滋子が崩御している。少年天子の純愛の相手である、

葵の前と、心の支えであった母の死に打ち萎れていた帝をお慰めするため、中宮徳子は、宮中一の美人であり琴の上手であった小督を、帝のお側へ差し向けられたといわれている。一方小督は平清盛の娘を北の方とする藤原隆房の思ひ人でもあった。

清盛にとつて中宮は娘、隆房は婿。小督と逢えないことをはかなんで隆房が死を願っている。と知つた清盛は激怒する。小督は清盛の怒りを漏れ聞き、ついにある夕暮れ、内裏を出て行方をくわらします。時に高倉帝十六才、小督は二十一才のことであった。

ここから謡曲「小督」の物語が始まる。平家物語の「頃は八月十日餘りの事なれば、さしも隈なき空なれども、主上は御涙に曇らせ給いて、月の光も朧にぞ御覽せられける。やや深厚に及んで「人やある人やある」と召されけれども御いらえ申す者もなし。ややあつて弾上大弼仲国、その夜しも御宿直に参りて遙かに遠う候ひけるが「仲国」と御いらへ申す。「汝近う参れ、仰せ下さるべき旨あり」と仰せければ、何事やらんと思ひ御前

近うぞ参じたる。 (主上と仲国との小督の行方についてのやり取りあり) 仲国つくづく物を案ずるに、誠や小督殿は、琴弾き給いしぞかし。この月の明さに、君の御事思ひ出で参らせて、琴弾き給はぬ事はよもあらじ。』この項あたりからを受けて謡曲「小督」では、ほぼ平家物語の筋書きに沿つて主上より寮馬を賜り、秋の月夜を急ぎ行き、中入りとなる。

後場では、ツレ小督が忍ぶ思いを慰むと、琴を弾く情景が歌われ駒の段となる。仲国は小督の調べを確かめ案内を問う。ここで侍女と仲国の掛け合いがあり、仲国は居座る。小督はこの様子を聞き、余りの事の乱れ心を抑えて、仲国を家に招き入れる。そして、主上への宣旨を聞き、御書を読み、玉体のおとろえを聞くに及んで、主上への変わらぬ思いを打ち明ける。このクセの段は小督が主役となっている。直の返事を貰つた仲国は必ずお迎えに来ると約束し、御酒を賜つた後、一さし舞を舞い小督に暇を告げ、仲国は都へ帰る。『謡曲小督』は終る。

この後、平家物語によれば、帝は小督よりの御返事を読み、仲国に直ちに小督を連れ戻すことを命じる。仲国は牛飼車を仕

立てて小督を御所へ連れ戻す。帝は目立たない所へ小督を隠し住まわせ、夜な夜な通つて姫君を儲ける。この姫君は範子内親王、またの名を坊門の女院といひ、治承元年(一一七七)に生まれている。

これを何処からか漏れ聞いた清盛は小督を捕らえ、尼にして追放した。尼になつた小督は、暫く清閑寺に身を寄せた後、嵯峨の辺りに住んでいたと言われている。時に小督二十三才頃のこと。ちょうど安徳天皇が誕生した治承二年(一一七八)頃、高倉帝十八才の頃になる。

私は「小督」は好きな曲の一つではあったが、何故かしっくりとしない、違和感を感じる作品だった。しかし、静寂の中にある清閑寺御陵を訪れ、平家物語の中の高倉天皇の立場を思うと、その一途な恋は、父 後白河法皇と岳父・清盛からの重圧を逃れる術ではなかつたかと思われてくる。そう考えると、謡曲「小督」の私の印象は、まったく異なつたものになつたのである。



とし 高齢にも負けず

金剛流 望月 悦夫

時は人を待たず。私も何時の間にか近頃話題の後期高齢者になった。還暦を迎えた横浜能楽連盟も若い人の参入を呼び掛けて久しいが兆は見えないようにで気掛りである。

私が謡の稽古を始めた頃、世の中は衣食住は不満足であったが、仲間は一・三十代が多数派で、能は観ないが謡は習う。なんとか続けているうちに謡い声が良くなり、賞められて気分が良くなり、能楽堂に足を運ぶようになり、書物を調べて遂にはま

つてしまい、生涯の趣味を得ることになった。今の世の中は、生活に不満は無いが、更なる便利を求めて、人が作ったIT技術の驚くべき進歩は、人を忙しく引回し駆り立てて、人々の余暇を奪ってしまった。能の歴史でも特異な時代だと思ふ。

こんな時代こそ能楽の出番と思ふ。削ぎ落とされた舞姿と音楽は人の魂を揺さぶり心に安らぎを与えてくれる。

次の世継ぎの世代のために我々に来ることは、先ず自身

が健康で、謡や仕舞や観能を楽しんでいる姿を見せること。そして気付いていない人達に切っ掛けの手を差伸べることと思ふ。さて、私は五年程前から太極

拳と気功を始めた。中国古来の健康法が謡と仕舞の上達に通ずると気付き励んでいる。太極拳は、**心息動**を極意とし、**心**は邪心を払いリラックスする。**息**は深く吸い永く吐く呼吸により気を養う。**動**は序ノ舞のようなゆったりしたリズムで鶴が舞うように二十四式を舞い納める。

気功の三要素、呼吸、動き、意識を同時に行うことで、全身の経絡を開き血流を促し、柔軟な体と内側から健康を作る。高齢者にも適した健康法と思っている。

「馬場さんは会社で年嵩でも、ここでは先輩ばかりだね」新堀会長からかけていただいた言葉が印象に残っている。「能狂言を鑑賞する人は増えてきたが、自分でやる人が増えないばかりか高齢化が進み、減少している」と新堀会長がご挨拶のたびに触れられる能楽愛好者数減の現状を象徴する言葉だった。

能楽連盟の悩み

喜多流 馬場 洋一

「アヒルの合唱」の域の小生とは憂うべき状況である」などは申し上げられないが、身近なところや世間を見回しても、それは現実である。謡曲が理解されていくことも多い。

いくつか例を挙げると…。会では常に最年少。最盛期は二十人近く居たメンバーは今では五人。今春、愚息の結婚披露宴で「高砂」を謡った。司会者と打ち合せ中の愚息から電話。「高砂って何？詩吟？長唄？」

ネットショップ・アマゾンのDVD部門で「謡曲」は売上ランキング五万一千位、「人間国宝シリーズ・能く謡曲」は十一万四千位の低さである。

我が身を顧みれば、客先で誘われ、思わず了承してしまい謡曲を習い始めた。こんな偶然が他の人達にもたびたび起これば悩みも雲散霧消するのだが、なかなか起きない。

「能は観るもの」と思っている人に「謡ってみよう」と思わせる妙手は何だろう。「謡曲をやるとカラオケで声が出るようになるよ」「健康に良い」

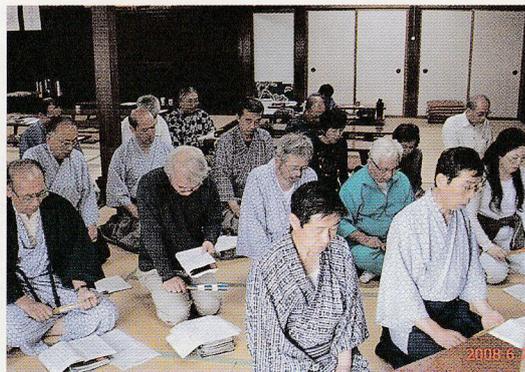
愛好者を増やす方法は本筋から外れた惹句で誘い込むしか思いつかないが、存外効果的かもしれない。小さな努力を積み重ねるしかないのかな、地球温暖化防止も目指すは小さな努力の積み重ねだし。毎日努力はできないが、「後輩作り」に一步踏み出すことにしよう。

第五十五回「半歌仙会」

金剛流 豊増 清明

三十六歌仙に因んで、十八曲の謡曲を謡う会を、私達は「半歌仙会」と呼んでいる。このような形式の謡会は各流派でも、各々の歴史があるようである。

横浜金剛会の構成会派の一つである石川島横浜金剛会はI日



I金剛会の横浜部会である。I日I金剛会は、昭和初期に石川島重工業(株)の文化会の一部門として石川島金剛会と称し東京、月島で発足した。戦時、終戦直後の中断を経て昭和二十六年に再発足している。昭和二十九年にはこの会の主催で第一回の半歌仙会を開催した。江ノ島の会社施設に五十数名が参加した。その後、社業の拡大に伴い武蔵地区、横浜地区にも部会が誕生し、活動も活発になった。石川島金剛会は石川島播磨重工業(株)の社名変更により、平成十九年からI日I金剛会と呼ぶことになった。半歌仙会は、東京、武蔵、横浜の三部会が合同で一年に一回、日頃の研修成果を発表し合い、懇親を深める会として、一回も欠かさず続けられている。

毎年六月始めの土、日曜を当て、一泊二日の合宿となる。土曜の午後一時に始曲、素謡で九曲謡って六時半に夕食、懇親会。翌朝は四時始曲、九曲謡って九時半解散が慣わしになっている。お役と地頭は予め決められているが地謡は全員参加となっているので殆どの出席者が十八曲を謡い上げることになる。大勢の人が大きな声を出し、朝は四時から始めるので、一般のホテルや旅館では受け入れてもらえない。会場探しが難しく、これまで寺社の宿坊や少し辺鄙な国民宿舎などが使われた。会の主催は、三部会の輪番制となるが、第五十五回の今年は、武蔵部会が担当した。会場は奥多摩山中、御岳神社の宿坊であった。各部会の会員や指導師範など四十数名が集った。翌朝、謡っている内に、白々と明るくなり、遙か昔、日本武尊が東征の折に見渡したという、あづまの山並みに陽が射して来る有様は、神々しいばかりであった。

来年は、横浜部会の当番である。既に江ノ島に間近な、海に臨む高台のホテルを予約している。民家に近く、他の宿泊客もあるの、翌朝の始曲は特別に八時になっている。

何を始めるにあたって、初める時の心の高ぶりは忘れられないものである。

能楽と私のかかわりは長い。社会に出たころと時を同じくしている。

今年六十周年を迎える横浜能楽連盟の活動にいまかかわっているが、趣味としてかかわり出した私も同じような時を過ごしていたことになる。

水戸という地方都市での出発であった故、舞台に立つという晴れやかなことも少なく、ただ素養として、お茶やお花と同列のお稽古であったが、ずっと続いて来たということは好きだったということに思いあたる。

長い間のかかわりであるが、過ぎてみると楽しかったあれや、これやが思い出されてずっと続けられた幸せをしみじみ思う。

結婚して東京に住むようになってプロの先生を知り、お稽古をしながら能の歴史を知り、古典を学び、これらの面白さを知り、ますます深みにはまってしまった。日本の中世からつづけて来た文化の大きさ、重さもす

初心を忘るべからず

観世流 三谷 光子
梅若会

ばらしいものと分かって来てもいる。

このような国に生れ育ってきたこともひそかに誇らしくも感じられる。別の活動で知り合った或る外務省の方を御案内したことがあったが、とても喜んで下さり、その後もご自分なりに学んでいらしたが、長い間続けられて来た古典文化に、国を越えた威厳を持って下さることを知った。

能楽の祖、世阿弥が最も大切な考え方といわれた「初心忘るべからず」のフレーズを大切に今後も精進してゆきたいものである。

能楽堂だより

二十年九月以降の公演

横浜能楽堂では、次のとおり公演を開催いたします。

このほか毎月、第二日曜日に「普及公演―横浜狂言堂―」を開催いたします。

源氏物語千年紀 企画公演

「源氏物語―それぞれの恋心―」
第二回「六条御息所―誇り高い愛と怨み―」

九月十三日(土)午後二時開演
能「葵上」(観世流) 浅見真州

第三回「玉葛」―乱舞する蛍と恋―

十一月三日(月・祝)

午後二時開演
能「玉葛」(喜多流) 塩津哲生

第四回「落葉―愛を拒む女の悲しみ―」

十二月十三日(土)午後二時開演

能「落葉」(金剛流) 豊嶋三千春

第五回「空蟬―衣を残して去つた女―」

十二月二十一日(日) 午後二時開演
能「空蟬」(宝生流) 大坪喜美雄

各回とも

案内人 馬場あき子

謡曲朗読 加賀美幸子

S席六千円、A席五千円、
B席四千円。

普及公演「プランチ能」

十月十六日(木)十時三十分開演
狂言「梟」(大蔵流) 大蔵吉次郎

能「橋弁慶」(観世流) 梅若晋矢
S席四千円、A席三千五百円、
B席三千円。

チケット発売中

お問い合わせ・お申し込みは
〇四五(二六三)三〇五五まで。

「謡・仕舞」を習いませんか

六百年以上の歴史と伝統のある能楽は、日本文化を代表する伝統芸能であり、ユネスコの世界無形文化遺産にも指定されています。

この伝統芸能の発展を願っている、横浜能楽連盟では「謡や仕舞」を習いたいという方々を募っています。

会員諸兄の身近で能楽の良さを感じ、謡・仕舞を習いたいという方々をお誘いしましょう。各流の役員に連絡してください。

《編集後記》

今年(昭和三十三年七月十一日創立)である。また、「幽玄」は平成二年十月六日に第一号を発行、三十六号を数える。これに因み記念号を発行した。

横浜能楽堂館長・山崎有二郎様、横浜市長・中田宏様、神奈川県知事・松沢成文様を始め多くの方々に、ご寄稿いただきました。ありがとうございます。

▽連盟創立六十周年の佳き年に第二十四回横浜五流能楽大会では、高校生以下の子供たちによる創作能「九頭龍」が演じられました。また、寄稿文「鏡板がほほえむとき」のなかで、五才と三才の孫が弟子入りして、謡を習い始めたというエピソードの紹介がありました。

還暦を迎えた能楽連盟の前途洋々たる、若い芽ぶきを感じられる思いである。○今号の編集は、梁亮一、小林美佐子、馬場洋一、三浦重信、三谷光子、室屋澄雄が担当しました。今後ともご寄稿、ご愛読よろしくお願ひ申し上げます。

横浜能楽連盟 連絡先

◎文書郵送又はFAXの場合
〒233 0013 横浜市港南区丸山台二丁目
233 0013 横浜市港南区丸山台二丁目
一九一七 新堀方
FAX 〇四五―八四四―二九〇三
◎電話の場合 横浜能楽堂
TEL 〇四五―二六三―三〇五〇